

「おい、ボス。どういふつもりだ？　こんなところにオレを連れてきて……」

人類にとって究極のプライベートスペース——トイレに、ロマーリオの困惑した声が響く。

リボンさんから連絡を貰い、沢田家で虹の代理戦争の作戦会議をしていたディーノを迎えに行き、雲雀恭弥との交渉のため並中に立ち寄った後ホテルに帰ってきたのだが、部屋に戻るなり手を掴まれ、トイレの中へ連れ込まれてしまった。

リビング側のトイレは広めの造りになっており、大人二人くらいなら狭苦しきを感じることなく一緒に入ることが出来る。

だが、本来ココは一人で入るべき場所であるし、彼女はトイレの世話が必要な子供でもない。

一体何の為にこんなことを、と視線で訴えると、ディーノは洋便器のフタを上げ、まるでソファアーにでも座るかのように深く便座に腰を下ろすと、ニツと笑みを浮かべながら言った。

「予行演習だよ。代理戦争のバトルの為のな」

「ハ？」

「ハ？　じゃねーよ。代理戦争のルール、お前にもこの前

説明しといただろ？」

「ああ、それならちゃんと覚えてるぜ。右腕としてボスをサポートするため詳細を把握しておかなきゃいけないからな。リボンさんにバトラーに選んでもらえなかったのは残念だが……」

「オレもお前にはバトラーの一人になって欲しかったんだが、リボンの奴が……まあその話は置いて、ならバトルルールを思い出してみな。オレの考えが分かるから」

「お、おう……」

明日から始まる代理戦争と、自分が一緒にトイレに入ることに関係あるのだろうか？

怪訝に思いながらも、先日師と弟分とのディナーから、やけにぐったりとした様子で戻ってきたディーノに聞かされた話を頭の中に思い返す。

そして、確認のために一つずつそれを言葉に出した。

「今回の戦いには時間制限があり、バトルは一日一回一定時間行われる。バトル開始一分前にウォッチが知らせてくれるが、それが何時か、そして戦闘許可時間がどのくらい設けられるのかはランダムのため不明……そうか！　そういうことか、ボス」

「やっとなんか分かったみてーだな」

ランダム、と口にしたところでピンときて声を上げると、ディーノが満足げに頷いて続けた。